

(続紙 1)

京都大学	博士 (地球環境学)	氏名	Syed Mahbubur Rahman
論文題目	Co-benefits as an enabler of sustainable adaptation to climate change: the case of Bangladesh (気候変動への持続可能な適応を可能にするコベネフィット：バングラデシュの事例)		
(論文内容の要旨)			
<p>Climate change adaptation at the local level is one of the core functions for the adoption of the 2030 Agenda for Sustainable Development. However, the long-term, invisible and unpredictable nature of benefits make local communities reluctant to practice adaptation. Against this backdrop, this dissertation focuses on co-benefits of adaptation and explore if they can be an enabler of sustainable adaptation through two empirical cases studies in Bangladesh.</p> <p>The dissertation consists of eight (8) chapters. Chapter 1, as an introductory chapter, states background, problems, research gap, main research question, and the structure of the dissertation.</p> <p>Chapter 2 presents the results of literature survey on adaptation co-benefits in view of sustainability of adaptation, performance assessment, approaches, and initiative, to provide three working hypothesis.</p> <p>Chapter 3 explains Bangladesh context and Chapter 4 research methodology, and data collection method for the empirical cases studies in the following chapters.</p> <p>Chapter 5 and 6 conducted the empirical case studies of Rajshahi, a drought prone area from the northwestern region, and Barguna, a coastal, flood-prone area in the south, assessing co-benefits of adaptation projects and analyzing changes in recognition on adaptation benefits of local people.</p> <p>Chapter 7 summarizes the findings to examine the three working hypotheses that are posed in Chapter 2, giving answer to the main research question, and have implications and recommendations on sustainable adaptation for policymakers.</p> <p>Chapter 8 concludes the dissertation with few recommendations.</p>			

(論文審査の結果の要旨)

気候変動の影響の深刻化に伴い、世界的に適応への関心が高まっている。気候変動枠組み条約の下でも、途上国の適応活動への支援を行う機関が創設されてきた。ところが、気候変動により深刻な影響を受けていると想定される途上国のコミュニティでも、必ずしも適応プログラムは円滑に執行されているわけではなく、その持続的な効果は確保されているわけではない。

本論文は、この課題に取り組む方法として共便益 (co-benefits) に着目し、共便益が適応プログラムの持続性に資するための文脈および条件を、バングラデッシュで実施された2つの適応プログラムの実証事例分析に基づいて解明した。

本論文の学術的な意義は、2つに要約することができる。第1は、適応プログラムによって正の共便益は、創出されても、気候変動に脆弱なコミュニティの裨益者に正の便益と**認識される形態**で分配されて初めて、持続的な適応—気候変動への強靱性の強化、社会的公正、環境への悪影響の防止—に寄与することを明らかにしたことである。先行研究の多くは、正の共便益が創出され分配されれば、裨益者は受益を認識することを暗黙の裡に想定しているが、適応は便益が目に見えにくく不確定の性格を持つために、この想定は必ずしも成立しないことを明確にした。

第2に、NGO主導の適応プログラムは、裨益者への正の共便益の分配と裨益者の認識の向上をもたらすように設計・実施されて初めて適応プログラムやその効果の持続性に寄与することを解明したことである。NGO主導のプログラムも、NGOやそのドナーの利害を考慮して設計・実施されたものほど、潜在的な裨益者に共便益と認識されにくいことを明らかにした。

そして分析から得られた結果は、政策担当者が適応プログラムをより持続可能なものにするために組み込むべき点に新たな知見を加えた点で社会的な意義を認めることができる。また、気候変動適応の経済分析と社会分析の統合的評価を行った点で、地球環境学の発展への寄与を認めることができる。

ただし、実証事例分析は家計調査ではなくサンプル数の少ない**Focused group discussion**に依存しており、分析結果の頑強性を若干損ねている点は否定できない。

この点を考慮しても、本論文の学術的及び社会的意義と地球環境学の発展への貢献は大きく、博士(地球環境学)の学位論文として価値あるものと認める。また、2020年12月3日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。